

「食べ物はかせの本」をつくろう（教材名「食べ物のひみつを教えます」（光村 3 年下）

～図書館を有効に活用しながら学力を高める子どもを目指して～

長野市立湯谷小学校 磯尾 智子

一人ひとりが食べ物について図書資料を読んで調べ、わかったことを一冊の本「食べ物はかせの本」にまとめ、学級で読み合ったり、全校のみんなにも読んでもらったりしようという学習課題を設定し、学習活動に取り組んだ。

公開授業においては、自分の調べたい材料を選び、図を使って整理した子どもたちが、図書資料を使って調べる場面で、調べたいことを目次や索引などを利用して探し、わかったことを情報カードに書き写す活動を通して、説明文を書く上で必要な情報を集めることを主眼とした学習活動に取り組んだ。

授業がはじまり、子どもたちと立てた学習計画を確認し、本時のめあてを立てた。「このことについて調べたい」と、調べることがはっきりしている子が多かった。書くことに対する苦手意識の強い A 児も、最初に調べることは「りんごが何に姿を変えるか」と決めていた。しかし A 児の中で、「りんごは、大豆や牛乳などちがって、あまり他の食品に姿を変えない」という思いがあり、少し不安な様子も見られた。私自身も、A 児が本の中から「りんご」について知りたい情報をさがすことができるのか、ということについては心配していた。そこで A 児への支援については、二つのことを考えた。一つ目は、他に「りんご」について調べる子がいなかったため、本が共有しやすい「梅」について調べる二人と同じグループにすること、二つ目は、私の方で A 児が選書していない本の中のものにのっているりんごの情報を提示することである。

調べ学習がはじまった。子どもたちは自分たちの選書した本を開き、調べたいことをみつけ、情報カードに書いていった。学習への集中が難しい B 児も、「麦」の本を手にし、どんどん調べていった。もしかすると「情報カードの枚数を増やしたい」ということが B 児の一番の思いだったのかもしれない。しかし以前の調べ学習では、どうしてもまわりの子の様子が気になって、調べることに集中できなかったことを思うと、今日の姿は全く違っていた。また、学校司書や私に自分がどんな図書資料を必要としているのかを話す時にも、「小麦粉からつくるパンと、米粉からつくるパンの違いが知りたいけれど、うまく調べられない」というように伝えることができるようになった。ただ「生き物の本がほしい」と言っていた 1 学期の頃に比べると大きく成長したことを感じた。中には、自分の調べたい情報を本の中から見つけ出すことができずにいる子たちもいたが、同じグループの友だちにたずねたり、一緒に本を読み合ったりしながら解決する姿が見られたことも、子どもたちの成長であった。

そんな中、A 児に二つ目の支援をすることが最後までできなかつた。有限な時間の中での個別支援である。個別支援まではいかなくても、ていねいに見ていきたい子、ヒントをそっと話しさえすればできる子など、一人ひとりの様子を見極めることができなかつたこと、観点を絞って子どもたちを見るができなかつたことによって時間がなくなってしまう、A 児に寄り添った支援ができなかつたことは大きな反省である。

調べ学習後の子どもたちの振り返りの言葉には、自分の力で図書資料を読んで知る楽しさ、調べて分かるおもしろさを味わうことができた、という思いが表れていた。そして、調べたことを、その後の書く学習へといかしていこう、という思いをしっかりとつことができたこともうかがえた。



学校司書と連携して授業を行った

○今日は、いろいろな分からないことが知れてよかったです。梅は、あんまりすがたをかえないと思っていたけど、いろいろなすがたにへんしんしていました。次やるときは、今日よりももっと調べたいです。もっと調べて、食べ物のはかせの本を作りたいです。

○調べたりないところもあったけど、本はとても便利だと思いました。私は、牛乳のことがきょうみぶかくなってきました。楽しかったです。人間のように、本にはちえがあるんだなと思いました。食べ物はかせの本を早く完成させたいなと思いました。

○本には知りたいことがたくさん書いてあって、本でもっといろいろなことを調べたくなりました。みんながすぐ書けるような本ではなく、「はかせ」の書く「食べ物のはかせの本」をつくりたいです。

授業を通して、図書館を自分の学習のために有効に活用できるようにするためには以下の3つの取り組みが有効であるということを感じた。

(1) 図書館や図書資料について学ぶ学習に計画的に取り組むこと

図書館を学習センターとして考えたとき、子どもにとって、図書館のことや図書資料のことを知っているということは重要である。図書の分類や配架のことを学ぶことで、その後の調べ学習で、本の分類や本が置かれている棚の場所を意識して、より意図的な選書をしていくようになっていった。今後、図書館教育の年間計画に基づいて、図書館や図書資料の知識を得たり、調べ方を経験しながら学んだりしていくことが、図書館を自分の学習のために有効に活用できる子どもを育てていくために重要であると考えた。

(2) 子どもの学習に合った図書館として整備すること

子どもを取り巻く環境が子どもの学習にとって重要であることは言うまでもない。それは、図書館も同じであるということであらためて子どもの姿から感じた。近隣の小学校の図書館を視察し、そのよさを感じ、参考にしながらも、本校の子どもたちの学習を思い描き、そこから、図書館の中にはどんな情報が必要なのかを考える大切さに気づかされた。何を掲示したり展示したりしておけば、子どもの主体的な学習や本に親しむ姿につながっていくのか、どんな机や椅子の配置にすれば、図書を選んだり読んだりしやすいのか、また、友と関わりながら学ぶ姿が生まれるのかななどを、試行錯誤しながら図書館を整備していくことが、魅力的な図書館、学びやすい図書館をつくることにつながっていくと考える。

(3) 子どもが図書館を活用しながら高めている学力を意識できる授業を実践すること

子どもたちが「食べものはかせの本」を作るために、「この食品は何に変わっているのか」を調べたいと思い、図書館に行き、本を選んで、そのことがわかるページから情報を抜き出し、情報カードに書くという一連の学習活動に取り組む中で、思考したり、表現したりしていることは多様である。単に知識を得ることだけでなく、本を探して情報を集める力や、必要なページに付箋を貼って、情報を比較したり、選択したりして、自分に必要な情報を整理していく力、わからない言葉があったときに、辞書で調べたり、まわりの人に質問したりすることなど、一つひとつの経験が、子どもが自分自身をよりよい学び手として育てていくうえで、重要なことであると考えた。目の前の子どもが、今、何を「知りたい」「調べたい」と願っているのか、図書館で学ぶことで、どんな力をつけることができるのか、そして、そのことを学習者である子どもが意識できる授業を構想し、実践していくことが図書館を有効に活用しながら学力を高めていける子どもを育てていく上で重要であると考えた。

今後も「日常の授業で図書館を利用する」ことを続け、図書館の活用を通して、学力を身に付けていく子どもたちの姿を目指していきたい、そう強く感じた1時間となった。